老人性難聴者の聞き取り困難とストレスに関する検討

○小渕 千絵

(国際医療福祉大学 保健医療学部 言語聴覚学科)

キーワード: 老人性難聴、聞き取り困難、ストレス

Listening problems and stress for older adults with presbycusis

Chie OBUCHI

(International University of Health and Welfare / Department of Speech and Hearing Sciences)

Key Words: presbycusis, listening problem, stress

目 的

聴覚障害児者においては、単に聴力が低下するだけでなく語音明瞭度にも低下がみられるため、補聴器や人工内耳を装着しても聞き取りが困難な場合がみられる。特に老人性難聴者においては、聴力に比して語音明瞭度の低下が顕著な例が多く、さらには中枢聴覚機能や認知機能の低下なども絡むため (Pichora-Fuller, 2003; 小渕・水上, 2006)、個別的な検討が不可欠といえる。

聞き取りにくさを抱える場合、雑音下での聴取や早口音声の聴取など、聴取環境によっては聞き取りが困難となり (細井ら, 1992)、情報不足や生活上の不便さにつながることが多い (勝谷, 2012)。このような日常生活における様々な聞き取りにくさが、ストレスにつながり、抑うつなどの二次的な心理的問題を生じさせると考えられている。老人性難聴者の心理的問題については、聴力程度やコミュニケーションストラテジーの違いから検討されているが (鈴木ら, 2006; 鈴木ら, 2013)、個々のストレスマネジメント能力についても関与すると考えられる。

そこで本研究では、老人性難聴者の抱える心理的問題について、年齢、聴力、語音明瞭度などの背景要因に加えてストレスマネジメント能力を含め、相互関係について検討することを目的とする。

方 法

対象: 補聴器外来に通院する老人性難聴者 7 名 (平均年齢 74.4 歳 (SD 7.7)、良聴耳平均聴力 42.7 dBHL (SD 6.8)、良聴耳補聴器装着下平均語音明瞭度 69.4% (SD 16.6)、補聴器平均装着期間は 2 ヶ月～30 年) 全例軽中等度感音難聴者であり、1～2 回/月の補聴器適合を継続中の例であった。

方法: 対象者に対して以下の質問紙調査を行う。

- 1) 聞こえについての質問紙 2002: 鈴木ら (2002) によって作成された質問紙であり、広く聴覚臨床において用いられている。良条件下の聴取 3 項目、環境音の聴取 2 項目、悪条件下の聴取 5 項目の計 10 項目に対して 5 段階尺度 (いつも聞こえる 1 点～いつも聞こえない 5 点) で応答を求めた。補聴器装着用軽中等度難聴者の中央値以下の総合得点は 22 点である。
- 2) 精神的健康度 (GHQ): 身体的症状、不安と不眠、社会的活動障害、うつ傾向について調査可能な GHQ28 を用いた。身体的症状、不安不眠は 2～3/7 で軽度、4/7 以上で中等度、それ以外は 1～2/7 で軽度、3/7 で中等度である。
- 3) ストレスマネジメント行動: 日常生活の中で 1 日 20 分間、人と楽しく会話する、運動する、リラックスするなどのストレスをコントロールするために役立つ健康的な活動 (津田ら, 2006) の有無について、5 段階 (毎日実

施 1 点～全くしない 5 点) で回答を求めた。

各質問紙についての得点を算出し、相互関係について検討すると共に、対象者の年齢、補聴器装着下での語音明瞭度 (40dBSL 提示、57-S 語表)、装着期間などの個々の因子との関係についても検討した。

結 果

老人性難聴者のきこえの質問紙における平均得点は 25.6 (SD 7.1) であり、1 例を除いた 6 例は基準となる 22 点以上の得点であり、何らかの聴取条件で聞き取りにくさを抱えていた。

GHQ においては、身体的症状は 3 例で軽度、不安と不眠は 2 例で軽度、1 例で中等度、社会的活動障害は 1 例で軽度であり、うつ傾向に該当する例はみられなかった。質問紙とは別に本人の自覚としては、日常生活においてストレスを感じることはほとんどないと報告していた。

ストレスマネジメント行動は、全例で実施されており、5 例で毎日、2 例で週に数回と頻度が高い例が多かった。

相互の関係について検討すると、きこえの質問紙で得点が比較的良好であった 1 例では GHQ の各項目で 0 点と問題がみられず、聞き取り困難と精神的健康の関係が示唆された。しかしながら、補聴器装着下の語音明瞭度は 94% と高くてもきこえの質問紙得点は 26 点と比較的悪く、GHQ の不安不眠項目で 5/7 と中等度の症状を抱える例がみられるなど、対象者の年齢、補聴器装着期間、補聴器装着下の語音聴力と聞こえの質問紙や GHQ との明確な関係はみられなかった。しかしながら、本例は対象者の中でのストレスマネジメント行動が最も少なく、精神的な健康度とストレスマネジメント行動の有無については関係する可能性が示唆された。

考 察

本研究で対象とした老人性難聴者 7 例においては、明らかな抑うつ傾向がみられる例はほとんどみられなかった。この背景として、ストレスマネジメント行動を行っている例が多いことや、補聴器外来において補聴器適合検査を定期的に受けており、補聴器装着に対する満足度が高いことも影響していた可能性がある。

またストレスの高さは、補聴器装着下での語音明瞭度や装着期間、聞こえについての質問紙にみられる自覚的な聞き取り困難の程度よりも、むしろストレスマネジメント行動の有無との関係が推測された。このため、補聴器適合に合わせて、個々の性格特性や生活スタイルなどについて注目し、心理的ケアを行うことが必要と考えられた。

今回の対象人数は 7 名と少なく、全例軽中等度難聴者であった。今後は対象者を増やし、条件間の関係などについてもさらに分析を進めていく予定である。